

龍谷大学世界仏教文化研究センター
2016年度臨床宗教師特別講義

講演名	自然災害とわたしたち—仏教者による社会貢献活動を考える—
開催日時	2016年10月24日(月) 10:45~12:15
場所	龍谷大学 大宮学舎 清風館 B101 教室
講演者	金澤豊先生 (龍谷大学世界仏教文化研究センター応用研究部門 博士研究員)
司会	鍋島直樹先生(龍谷大学 文学部教授)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 応用研究部門
共催	龍谷大学実践真宗学研究科
参加人数	41人

【講義のポイント】

自然災害は、わたしたちの生活と切り離された特別なものではない。歴史もそれを証明しており、日常の中に必ず起こる出来事として心構する必要がある。

その際に、私たち自身のあり方を示す仏教用語、「無明」を理解しておくことは有意義であることが指摘され、無明理解の変遷が、①原始仏教②大乘仏教③親鸞の理解の順に説明された。その上で、いわゆる既存の社会貢献活動への問い直しを行うために、特に災害時における仏教者独自の役割とは何か問いかけられた。そこで講師の取り組んでいる仮設住宅訪問活動が紹介され、苦悩を抱える人の話を聞くことの意義、有用性と普遍性、仏教者の社会貢献の一例が示された。その活動の動機と目標、活動者の支えとなっている仏典の言葉が紹介されることで、仏教と現代社会とを繋ぐ結び目が呈され、無明を照らすものが仏語であることが提言された。

【講義の概要】

■はじめに

戦前の物理学者、寺田寅彦の論考「津波と人間」が取り上げられた。災害を防ぐには「人間がもう少し過去の記録を忘れないように努力するほかはないであろう」という寺田の言葉は、科学技術の進歩した現代に於いても変わりなく有用である。

南海トラフ地震の被害想定も積極的になされている現代は、改めて自然災害に際して何ができるのかを考えざるを得ない時代であり、災害に備え、災後「何をなすべきか」は、私たちが今考えるべき問題であるとの提案がなされた。

■仏教者の社会貢献

社会貢献とは何かが参加者に問いかせられ、一人一人の持つイメージが異なるように、一言でまとめきれないものがあることに気づかされた。また、様々な支援が必要とされる自然災害時において、宗教者の役割はどのように存在するのか。宗教的ニーズといった言葉を無批判に受け入れていないだろうかといった疑問が投げかけられた。

宗教者にしかできないことを明確にして、役割を問われる際には、目的と方法と対象を明文化しておかなくてはならない。またそれは、平常時から備えるべき作法だとの提言も行われた。

■東日本大震災 復興支援活動

講演者の関わりが深い、浄土真宗本願寺派の支援活動についての紹介があった。苦悩の要因を見定め、「流入物の撤去」「側溝捜索作業」「写真洗浄作業」「お茶会サロン活動」「仮設住宅訪問活動」のそれぞれの現状と方法が具体的に話された。

■「聞く」ことの意義

特に「仮設住宅訪問活動」においては聞くことが重要であり、それは気持ちを受け取ることでありと示された。聞くこと自体は、多くの人が日常的に行なっているが、果たして意識をして聞くということができているのかというと覚束ない点がある。

そこで自覚的に相手の気持ちを受け取り、相手との対等な関係を構築することが苦悩を支えることになり、「聞く」ということは物質的な提供ができなくても、大きな役割であることが提示された。

【まとめ】

受講者からは、震災後多くの人が「忘れない」と言っていた東日本大震災のことを忘れていた自分に気づいたというコメントや、何もできなくて申し訳ない気持ちでいたが、講師からの「支援に遅いも早いもない」という言葉に後押しをいただいたといった所感があった。講義の内容は主に東日本大震災に関係するものであったが、それは特別な出来事として捉えるだけでなく、あらゆる自然災害時において考えなければいけない内容でもあったと感じた。

以上

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センターリサーチ・アシスタント 大澤絢子